

平成26年度 第1回 教育課程編成委員会 報告書

1. 日時 : 平成26年7月24日(木) 15時00分～16時00分
2. 場所 : 日本福祉教育専門学校 高田校舎222教室
3. 出席者 : 委員長 山田 幸一 (日本福祉教育専門学校副校長)
- 委員 金川 宗正 (社会福祉法人 フロンティア 法人本部 事務局主任)
- 委員 松山 慎司 (社会福祉法人 西東京市社会福祉協議会 専門員)
- 委員 渡邊 大樹 (社会医療法人 社団正志会 南町田病院 専門職員)
- 委員 小内 仁子 (東京都言語聴覚士会 学術局部員)
- 事務局 小杉 泰輔 (事務部長)
- 事務局 川口 朝子 (教務課)
- 事務局 積田 修真 (教務課)
- 書面参加: 委員 肥後 義道 (社会福祉法人 敬心福祉会 池袋敬心苑施設長)

4. 議事

- 1) 校長挨拶及び職業実践専門課程認定の謝辞 (久門)
- 2) 職業実践専門課程の認定状況の説明 (小杉)
- 3) 委員の出席状況の確認 (小杉)
- 4) 平成25年度第2回教育課程編成委員会の議事録の確認 (山田)
- 5) 委員会の結果を踏まえた改善・工夫について: ソーシャル・ケア学科 (積田)

① 教育課程編成委員の意見

権利擁護と成年後見制度に重点を置いて欲しい。就職先は東京近郊が予想されるが、これから高齢者の一人暮らしがさらに増え、親族との関係性が希薄になり、判断能力低下者への対応ならびに契約関係の対等化も含め知識を向上して欲しい。

② 意見を踏まえた授業等の活用状況

身体拘束のケアのあり方、ALS 患者の方を講師として招きケアプランの作成、ハンセン資料館見学など、「個の尊重」・「個の権利」をテーマとした授業を行った。また、学んだことをフィードバックし知識を深めた。「レジデンシャル・ソーシャルワーク」・「国際福祉事情」は後期開講のため、さらに「個の尊重」・「個の権利」について多面的に学んでいく。

- 6) 委員会の結果を踏まえた改善・工夫について: 介護福祉学科 (積田)

① 教育課程編成委員の意見

就職後、仕事に没頭しすぎて精神的に病を患わせる可能性がある。自己コントロールできるような科目を設定してはどうか。現場ではグループワークを求められる場面が多い。専門職の知識や技術だけではなく、自分の趣味を最大限に活かせるよう授業の内容を工夫してはどうか。

② 意見を踏まえた授業等の活用状況

利用者の方と接する際にネガティブ思考で物事を考えると、自分自身のフラストレーションが溜まり仕事に支障をきたす場合がある。ネガティブ思考をポジティブ思考に変えていくためのリフレーミングを後期から取り入れていく予定である。また、今年度から「介護のための音楽と心理」を開講し、現場で使える知識・技術を学んだ。

- 7) 委員会の結果を踏まえた改善・工夫について: 社会福祉学科 (山田)

① 教育課程編成委員の意見

他学科同様、「個の尊重」・「個の権利」について学んで欲しい。

② 意見を踏まえた授業等の活用状況

社会福祉援助技術演習において「個の尊重」・「個の権利」を学んでいる。社会福祉学科は他学科とは異なり、卒業と同時に社会福祉主事任用資格を取得できる。国家資格取得のための科目と比べた場合、深くは学んでいないが、介護分野全体の知識を得ている。

8) 委員会の結果を踏まえた改善・工夫について：言語聴覚療法学科（川口）

① 教育課程編成委員の意見

学生の学力低下が目立ってきているため、入学前の講習会・フォロー体制を検討してはどうか。また、現場で活躍する卒業生を招きモチベーションの向上させるため、言語聴覚士以外の他職種との連携を学ぶ授業を行ってはどうか。

② 意見を踏まえた授業等の活用状況

入学前にパソコン講習会を実施した。Word・Excel・PowerPoint 等、授業に必要なソフトの使用方法を7名の参加者にレクチャーした。入学後のパソコンに対する不安の声は上がっていないため、来年度も継続していきたい。また、チームアプローチ論については、1年次科目の「リハビリテーション概論」において、PT・OTの視点も踏まえた授業を展開していく。

9) 学校経営の業績重要指標として、重点課題に対する意見交換

① 「学校経営 業績重要指標 Change & Challenge 指標の設定」の説明（小杉）

② 教育指標として、国家試験合格率の向上

各学科とも国家試験の合格率は全国平均を上回っているが、さらなる合格率を目指すにはどのように高めていけばよいか。ソーシャル・ケア学科は社会福祉士と介護福祉士のダブル国家試験合格を目指している。通常授業とは別に国家試験対策講座の授業を行っている。社会福祉士養成学科は大学卒業、ソーシャル・ケア学科は高校卒業が入学条件のため、入学時から学力の差はある。4年間のモチベーション維持も重要になってくる。（山田）

国家試験直前に講座を設けるのはどうか。また、介護福祉学科とは異なり学生の人数が少ないため個別対応やグループワークを取り入れるのもよいのではないかと。（金川）

ソーシャル・ケア学科の合格率は36.4%。社会福祉士養成学科と比べると合格率の差は大きいですが、他大学と比較してみるのもよいのではないかと。現時点では介護福祉士の国家資格を卒業と同時に取得できるため、「社会福祉士を取得できなくても。」という安心があるのではないかと。ダブル国家資格取得のためのモチベーションづけも重要なのではないかと。現役受験を離れると合格率は低くなる。なるべく在学中に合格して欲しい。（松山）

言語聴覚療法学科の合格率は90%を超え、毎年非常に高い数字を保持している。模擬試験を定期的に行い、過去問を中心とした演習を行っているのが要因の一つだと思う。（渡邊）

言語聴覚療法学科の不合格はわずかに合格点に達していないのか、それとも全くとどかないのか。もし、全くとどかない場合には、国家試験の受験自体を考える必要がある。（小内）

③ 教育指標として、中途退学率の削減

学校全体で6.7%。特に中途退学率が多いのは言語聴覚療法学科の15.2%である。全学科長が参加する教育構想会議や教職員連絡会議において、退学防止策の情報を共有し、休学や退学に結びつきそうな学生に対して様々な対応を行っている。また、高校卒業学科については、担任だけではなく学科長とも面談を行っている。何らかの病を抱え退学するケース、クラス内の人間関係に適応できず退学していくケース、さらには担任との面談前に家族間で進路変更を決定しているケースもある。経済的な理由で退学に結びつくケースは学内で対応しているため何とか踏みとど

まっている。(山田)

グループ校以外の退学状況はどうか。学校の対応だけでは限界ではないか。平成 25 年度の退学率は 0%だが、今年度の目標ではプラスにしている。目標が低下しているのではないか。(金川)

退学者は多いと聞いている。家庭においても対応して欲しいが、社会人の場合にはどのように対応してよいか判断に迷うケースがある。(山田) 見込みで退学率を算出せざるを得なかった。今年度の目標数値については、調整した結果である。(小杉)

休学や退学に結びつくような学生に対する教職員の努力は素晴らしい。この数値をさらに下げるには、そうとうな努力が必要である。退学率が 0%の学科もある。クラスの雰囲気が良いのか？(松山)

どの学科にも退学に結びつく学生はいるが、0%の学科は担任からクラスでまとまるように伝え、学生同士のフォローによって 0%が実現した。(山田)

一定の学力に達しない入学希望者を入学させることによって、定員充足率は上がるが、一方で学力不足のため勉強についていけず退学になるのではないか。入口をもっと厳しくするのはどうか。グループ校である臨床福祉専門学校の退学率も同程度であるが、言語聴覚療法学科は専門性が高いため、入学後に少しでも方向性が違っていると感じたら退学に結びつくのではないか。(渡邊)

一般入試・AO入試において、合格者は選抜している。(山田)

支援指標としての就職率の向上と、募集指標としての入学定員充足率の達成については、委員会終了時刻のため、次回の議題とする。(小杉)

5. 次回の委員会

平成 26 年 10 月 16 日 (木) 15 時 00 分～16 時 00 分

6. 総括 (山田)

本年度第一回目の教育課程編成委員会が開催され、各委員から現実的な意見や各種提言をいただいた。今回は専門学校の目的が社会に通用する職業人の育成であることに鑑み、入学から卒業までに様々な実践現場で求められている知識や技術をいかに習得し、国家試験合格に結びつけていくかに焦点が当てられた。あわせて、退学希望者への対応や配慮の問題もあり、この点は全学的に教職員の連携と協働体制による個々の学生への充実したサポート力に負うものが多いことも認識された。今後も各委員とともに退学防止策を検討し、その内容が教育現場に反映されるようにしていく必要がある。

以上